



地歴・公民科 土谷 渉

彼が生きた紀元前1世紀と  
21世紀の今は人間社会の  
本質という部分において  
そんなに大きな違いは  
ないように思えます

## 『李陵・山月記・弟子・名人伝』

中島 敦 著 角川文庫

— どんな中高生時代を送られていましたか？また、印象深い思い出があれば教えてください。

どこにでもいる歴史が大好きな中高生だったと思います。中学の頃の部活はバスケットと演劇部に所属していました。印象に残っているのは演劇部の方でしたね。私が通った学校は当時、人権教育にとっても力を入れていて、劇の内容も人権を取り上げたもの。毎年大きなホールで発表会をするんですけど、私が中3の時、主役に抜擢されたんです。多くのお客さん、それも見知らぬ大人の前で舞台上に立つなんて初めての経験。自分のセリフを間違わずに言うだけで必死でした。無事、劇が終了して、幕が降りてくる時に受けた大きな拍手は涙が出るほど感動しましたよ。そのあとの打ち上げで駅前のファストフード店に行ったんです。先生や仲間たちと食べたハンバーガーが最高に美味しくて。あの時のことは今も鮮明に記憶に残っています。私は本当は歴史学者になろうと思っていたんです。だけど、結果的にこうして多くの人の前で話しかける仕事を選んだのは、この時に得た感動が少なからずあると思います。

— 今回先生が取り上げられた『李陵・山月記・弟子・名人伝』。この本はいくつかの短編からなる短編集ですね。その中でも今回は『李陵』を取り上げること。それはなぜですか？

この本は中島敦という人が書いた歴史小説です。登場人物はみんな歴史書で確認できる実在の人物。ストーリーも大きくは史実にそって進められます。中島さんは持病の喘息で33歳の若さで亡くなられるのですが、『李陵』という作品は彼の遺作となります。彼の作品では『山月記』が高校の教科書に掲載され広く認知されていますが、『李陵』は彼の没後に発表された、彼の最高傑作の一つともいえます。この本自体はトータルで270ページ強ありますが、『李陵』はお





およそ50ページほどで短いです。人名や地名、戦の話なので出てくる言葉は見慣れない難しそうなものが多いのですが、文章自体は簡潔。綺麗にまとまっています。しかし、内容が考えさせられるのです。なんか複雑な感じのモヤモヤ感といいますか。余韻があるのです。主人公とその周りの人たち。彼らが選択した人生はどれも間違いではない。その時置かれた環境によって、何かしら取捨選択をしなければならなくて。そしてその選択が後の自分の人生に大きく関わっていく。今の世の中もそうじゃないですか。自分の思い通りになることってどれだけありますか？スケールの違いはあれど、この世は不条理なことばかり。李陵が生きた紀元前1世紀と、21世紀の今はインフラや社会道徳は大きくことなりますが、人間社会の本質という部分において、そんなに大きな違いはないように思えます。

まあ、いろいろ話しましたが、要は私自身『李陵』を読んでいろいろ考えさせられましたし、きっと在校生のみんなが読んでも、何かしら考えさせてくれる本でしょう。なので、今回「おすすすめ図書」で取り上げました。

——この本の内容をネタバレしない程度にお話いただけますか？

紀元前1世紀から2世紀の漢王朝の話、中国大陸が舞台となります。当時の漢は匈奴という国と激しく領土争いをしていました。主人公の李陵は祖父の頃から3代続く漢の軍人で武将です。李陵は当時の漢の武帝に対して、匈奴との戦に自分も参加させてほしいと直訴し、結果的に彼は5千の歩兵部隊で3万の騎馬部隊と戦うこととなりました。匈奴の方は本隊で、いわば精鋭部隊です。それでも両者は激戦を繰り広げ、最初の8日間で李陵は匈奴軍本隊の三分の一を討ち取ります。しかしながら、最終的には匈奴に捕らわれ捕虜となりました。その知らせを聞いた漢の武帝は激怒します。側近たちも武帝を怖れて捕虜となった李陵を非難します。ただその中で唯一、李陵を弁護した人物がいました。それが司馬遷です。そもそも、騎馬戦を主力とした3万人の匈奴本隊と戦うにあたって、李陵に与えられたのは5千人の歩兵部隊。圧倒的に不利な戦において、それでも李陵は匈奴軍本隊と激戦を繰り広げ、最終的には負けはしたけど、敵に1万という大きな損害を与えたではないか、と。司馬遷は李陵に対する弁護をしたせいで、武帝の怒りを買って、宮刑に処せ

られます。一方、捕虜となった李陵は匈奴の王にかなりの厚遇を受けます。匈奴の王からすれば、彼は勇敢に戦った武将で尊敬に値する人物なのです。

この物語には人間の醜い部分や不条理な部分がたくさん出てきます。先に匈奴に捕えられた他の武将が保身のために李陵に罪を被せて、そのせいで漢で李陵の帰りを待つ彼の家族が全員処刑となった話。同じく先に匈奴に捕えられたけど、匈奴側に寝返りすることを拒み、辺境の地に飛ばされた李陵の旧友・蘇武。匈奴王に命じられ、匈奴側の立場で彼に転向の説得を試みる李陵。宮刑に処せられた後、その怒りと悔しさから逃れるために、父から託された歴史書の執筆に集中する司馬遷。そして彼らの人生にあまりにも大きな影響を与えた武帝の死。その後、彼らがどうなったのか。史実に基づきながらも、中島さんの簡潔で鋭くて深い





表現力によって、どの人物もいろんな意味で魅力的に描かれています。

——この本を通じて、大阪国際の生徒たちに伝えたいことは？

先にも書きましたが、私たちが生きるこの社会って不条理なことがたくさん起きていると思うんです。本校の生徒たちにしてみても、1日の大半を過ごす学校での生活、クラブ活動…。多分楽しいことばかりではないでしょう。感受性の高い中高生時代、その狭い世界の中でも何かしらの矛盾や葛藤を抱えながら、前に進んでいると思うのです。だからこそ、スケールや環境の違いはあれど、今から2千年以上前の人たちを描いた物語を読んで、共感したりモヤモヤしたり、矛盾や不条理を感じることもいいんじゃないでしょうか。

本は他の情報デバイスと違って、素晴らしく良い点があつてね。例えば、テレビやネット上に上がっている動画って、流れている情報をこちらが視聴するって形式じゃないですか。情報を取りに行くまでの行為は能動態だけど、実際に情報を得るにあたっては受動態。だけど、本は情報を得ようとすると、自分で本を取りに行って、手にして開いて、目で文字を追って、ページを捲らなければなりません。すべてが能動態で完結する、自分で考え込むことができる媒体なんです。大阪国際では朝に読書の時間を設けているし、それよりも何よりも、校舎自体が図書館と一体化している学校って、そうそうありません。1階から4階までいた

るところに本が陳列されていて、生徒たちは休み時間に自由に本を手にすることが出来ます。この環境はとても恵まれたものだと思います。本が好きなのはもっとと食欲に、本にあまり興味がわかなくても、休憩時間、書棚からチラッと見た本のタイトルが面白く感じたのなら、ぜひ手に取って欲しいです。もしかするとその本が、これからの人生を少し良い方向にわかかわせてくれるかもしれません。

これは私の個人的な印象なのですが、この国って少しずつ衰退を続けているように感じます。年々貧富の差が激しくなって、サラリーマンの平均収入も二十年前や三十年前と比べると下がっています。街に出ても、商店街ではシャッターが閉まっている店舗をよく見かけるし、なんせ書店自体をあまり見かけなくなりました。私が教員なので敏感に感じているのかもしれませんが、今の中高生は、私たちが中高生だった頃と比べて、いろんなところで大変なんじゃないかな。

せっかく縁があつて大阪国際に入学したんです。そしてここは読書環境がとても恵まれている学校です。在校生には在学中にたくさんの本に触れて、「考える力」を育ててほしいですね。そして、たくましく自分の人生を歩んでほしいと思っています。

インタビュー

大阪国際中学校高等学校 教員 平田 桂子